

玉篇残卷論考

上 田 正

序

玉篇は、梁の顧野王が大同九年（五四三）三月二十八日述作した古字書であって、もと三〇卷（日本国見在書目には三一巻）あったのだが、中国には早く逸亡して、現在わが国に巻八・九・十八・十九・二二・二四・二七の七巻の残巻を存する書である。この書については先に岡井慎吾博士の学位論文「玉篇の研究」があり、近く馬淵和夫博士の「玉篇佚文補正」があるが、自らの続補する逸文の出典も五十余点にのぼり、残巻そのものについても新たな見解を抱いているので、ここに博雅の批判を願うわけである。

玉篇残巻は⁴東方文化叢書の複製本を用い、疑義あれば架蔵江戸末期写本を参看し、両者に欠ける部分は古逸叢書に従った。

一 先学の所論

玉篇残巻諸本が同種のものであるかどうかという点について始めて論じたのは岡井博士である。氏は巻首を存する巻十八・二二・二七の目次の記載形式を検討して、巻十八・二七を古き形とし、内容上より、⁵「第十八に限りて説文を

引ける態度が他巻と異なりて、六書の説明又は従某々声までを引けることなり」と述べて、卷十八を最も古き姿としている。

その後では貞苻伊徳氏の論があつて、秀れた鋭い考察である。玉篇を抄略した書で空海が撰述したとされている。「篆隸万象名義」と、残巻諸本とを比較して、要約すると次の九項ぐらいになる。

A 卷二七

1 残巻に数個の反切ある字で、万象名義はその一つのみを記す22字と、反切を誤写していると思われる33字とを除くと、他の字はすべて反切の用字が全同である。

2 續子反・経結反など、反切字の一字を脱落していることまで一致するのは、全同自体が奇異である。

3 聲苦體反は明らかに苦體反の誤りであるが、両書ともに同じく誤つて記している。このようなものが七例ある。

4 岡井博士が「篆隸万象名義を見て」に、「玉篇の謬を襲ふて音義が入り違つて居るやら他字の義をくつ付けるやらして居る」と述べている例もこの巻である。

5 以上のことで、空海の所拠本の一種の系統本がこの残巻二七であろう。

B 他の諸巻

6 山田孝雄博士岡井慎吾博士が、万象名義と玉篇残巻との不一致の例として挙げているのは、すべて言部と食部すなわち卷九に限られている。

7 各巻の反切を比較するに、反切用字の異なるものは、卷二二に非常に少く、卷十八・十九では卷九より多い。

8 山田博士が万象名義に玉篇残巻に存せぬ積義があることから、「その積義に於いては撰者独自の見地によりて取舍

し、又加へたる所あるべきを思ふものなり」と述べて以来、諸学者はこれに従っているが、新撰字鏡の玉篇引用と考えられる部分と比較するに、必ずしも空海の増注とはいえない。

9巻二七以外については、残巻と空海所拠テキストとに内容の出入があつたと考えるのが妥当であらう。

二 卷 二 七

この巻については、前述の貞苻氏の考証に賛意を表するが、氏の挙げていない諸点を付加する。なお篆隸万象名義は現在高山寺に蔵せられている一本しか存せず、それを影印した10崇文叢書本と、さらにそれを縮印した上海刊本とがあるが、近く出版された高野山大学編のものが最も善本で、これを用いる。また玉篇には現代常用しない字が多く、印刷に困難を感ずるので、挙例は最少必要限度にとどめ類例はその数を示すこととする。やむを得ず特殊な字を挙げるときは、①の如く番号を入れておいて、最後に別表を用意した。

まず万象名義と玉篇残巻と一致することが特異的な例としては、絡字をともに絡字に誤ること、紆於于反の於字がともに誤った書体となっていることを追加できて、名義の撰者が現存の残巻そのものに拠って撰述したかの感を抱かせる。しかしそう考えてはならない例として、篇字は残巻が古到反と記すのに名義は吉到反に作るような反切用字の違いが五例ある。残巻二七と万象名義の所拠本とは、共通祖本を持つ極めて近い関係にあるといふべきである。

三 卷 二 一

この巻と名義との反切用字の違いが非常に少いことを貞苻氏が調べているが、両書の親近性についてはなお次の諸

点を加えることができる。

1 両書ともに①・②の字順に出ている部分は、その積義から考えて、字順を誤っていることが明らかである。⁽¹²⁾ 宋本玉篇は逆順になっている。

2 ③字をともに④字に誤っている。

3 ともに⑤字の次が⑥字となっているが、積義から考えて、中間の⑦字を脱していることが明白である。宋本玉篇は誤っていない。

4 ともに略字の次に低字が続いて二回出て、しかも積義は異っているのは、宋本玉篇に照らして、最初の字が衍字でその積義は上字の積義の中に入るべきものであることがわかる。

5 ともに陷字の音注を「音」とのみ記しているのは、神田喜一郎博士蔵⁽¹³⁾「大乘理趣六波羅蜜経积文」引用玉篇逸文に、「音色」とあるにより、原本の直音注を誤脱していることが明白である。

以上のように、卷二二と名義とが近い関係であることがわかるが、残卷目次に山部の字数を百四十七字と記しているのに、本文は百四十五字で、懈・⑧の二字を脱している。これに対して名義はその二字を記していて、両書が直接関係ではなく、少くとも中間に一本の転写本を持つ共通祖本の関係にあることを示している。卷二七に比較するに、両巻とも万象名義と近い特徴を持っているが、卷二二よりも卷二七のほうが、さらに名義に近いといえる。

四 卷 九

残卷の誤について先学の指摘する例はすべてこの巻から拾っているという貞荊氏の所説は前述したが、なお本巻の誤脱を次の如く挙げることができる。

1 ㊦字の名義に見える「之救反詛・呪」の部分14が、残巻に落ちている。

2 名義にも見え、「香菓字抄」所引玉篇逸文にも見える㊦字が、残巻に脱している。

3 神田博士蔵大乘理趣六波羅蜜經釈文所引玉篇逸文に見える訟字の訓義の一部分「声類扶也」が、残巻に見えない。

4 香菓字抄所引玉篇餘字に「声類……」とある「声類」の書名を残巻は記していない。

5 「政事要略」所引玉篇盜字に、「説文私利賊物也徒以欲得」の訓義を、残巻は脱している。

先学の挙例の上にこれらを加えることによって、巻九が善写の書でないことが、いよいよ明らかとなるであろう。

この巻の内容を証として、万象名義に加訓ありとか、撰者空海の知見を見るべしとかいう山田博士以下の見解は、承引しがたいところである。残巻に無くして名義に見える訓義の部分は、特に知見らしい特色も何もない平凡なものに過ぎず、単なる誤脱か転写者の粗雑な略記と見るべきである。山田博士の千慮の一失といわねばならない。

五 各巻の反切用字の特色

岡井博士が、説文解字を引用する態度より見て、最も古色ありとした巻十八の反切用字を、万象名義に比較するに、次表のような同音異字の多い特色を発見する。すなわち式字は残巻に詩力反とあり、名義に舒力反とあるのだが、詩・舒ともに書母の字であって二書の用字が同音異字であるという現象である。このことは巻十九も同様であって、両巻の近いことを知ることができる。

表には、明らかな誤写や誤写の可能性の強いものは省略した。また声類・韻類は「切韻」の音系に従った。玉篇よりも分化している切韻に照合するほうが、玉篇の音系の特色を明らかにし得るからである。印を付したのは宋本玉篇に一致するものである。

卷十八同音異字反切表

⑩ 般 舳 ⑮ ⑬ 軸 轅 ⑫ ⑪ 式	字
力 蒲 除 蒲 徒 除 蒲 竹 於 詩	殘
庭 安 陸 勞 篋 陸 篤 狷 蟻 力	卷
力 菩 除 菩 徒 除 菩 竹 於 舒	名
丁 安 六 勞 頰 六 篤 葉 綺 力	義
青 並 屋 並 ⑭ 屋 並 葉 紙 書	声
韻 母 韻 母 韻 韻 母 韻 韻 母	韻

卷十九同音異字反切表

沐 漱 滌 ⑳ 澗 浙 ㉔ ㉓ 湯 ㉑ ㉒ 滯 渥 ㉑ ⑰	字
莫 所 達 桑 達 桑 達 耕 耻 詩 枯 直 烏 於 理	殘
㉓ ㉑ 的 礼 見 激 ㉑ 眼 郎 立 郎 厲 学 劉 ⑱	卷
莫 所 徒 先 徒 先 徒 古 他 ㉑ 苦 直 烏 於 力	名
卜 溜 的 礼 見 激 ㉑ 眼 郎 立 郎 例 角 留 ⑱	義
屋 宥 定 心 定 心 定 見 透 書 溪 祭 覺 尤 来	声
韻 韻 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 韻 韻 韻 母	韻

同音を表わすのに異なる字を用いるこのような現象は、わが国における転写流伝の間に生じたものとは考えられない。残巻と万象名義所抛の玉篇とは、中国本土において既に異った反切用字であったと考えるのが自然である。そうすると、どちらが顧野王の原姿であろうか。反切用字のどの字が残巻に用いられ、どの字が名義に用いられるという分岐はなく、それぞれ双方に互用されながら、対立する全体としては一つの傾向が認められるのである。従ってどの字を用いる傾向の強いほうが古いものかと考えるべきである。重出する用字の蒲一菩・達一徒・桑一先・陸一六の対立について、切韻系韻書ではどちらを多く用いるかを、陸法言の切韻（六〇一）より広韻（一〇〇八）に至る間の各家切韻の残巻・逸文を資料として調べてみるに次の通りである。

蒲一菩では前者が常用字で後者は使用例が全く無い。達一徒では、前者は正反に使用例なく又反にのみ用いられ、後者が常用字である。陸一六では、前者は又反の中に稀に用いられるのみで、後者が常用字である。桑一先では前者が後者より使用例が少い。切韻の又反は撰者の作った反切でなく、先行の他書から転載したものが多くことを併せ考えて蒲一菩を例外として（このことは後述する）、用字が切韻に近い名義が時代的に新しく、残巻が古い傾向であるといえる。その他の用字については説明を省略するが、同様の傾向を示している。また宋本玉篇に一致する反切が名義に多いことも、右の考察の佐証となるであろう。

次に他の巻ではどうかを調べる。巻八は残存部分が少くて立証しがたく、巻二二・二七は前述したように万象名義の所抛本と同系統のものであるから、もちろん反切用字の対立は認められない。残るは巻九であって、次の表によって示す。

④ ₂ 餓 ④ ₁ 飴 ③ ₉ ③ ₈ 欣 ③ ₀ ③ ₅ ③ ₄ ③ ₃ ③ ₂ ③ ₉	字
徒 五 徒 翼 舒 欣 虛 思 所 胡 徒 力 ③ ₀	殘
奚 賀 當 之 臣 既 殷 唐 金 典 結 官 雨	卷
達 魚 達 ④ ₀ 舒 希 ③ ₇ 思 所 何 達 陸 呼	名
奚 賀 當 之 辰 既 殷 堂 今 典 結 官 甫	義
定 疑 定 喻 真 曉 曉 唐 侵 匣 定 來 ③ ₁ 曉	聲
母 母 母 母 韻 母 母 韻 韻 母 母 母 韻 母	韻

この表は、卷十八・十九とは逆に、万象名義の用字が古色を存し、残巻が多く宋本玉篇に一致する特色を示す。この正反對の現象をいかに解釈すべきか。

結論を先にいうならば、万象名義の第四帖までは空海の撰であり、第五・六帖は後人の続撰であつて、空海と続撰者との所拠玉篇は別の異本であつた。卷九は第三帖に含まれ、卷十八・十九は第五帖に含まれているので、この結果を示すのであるということになる。そこで万象名義の撰者のことを先に論証しなければならぬ順序となる。

六 篆隸万象名義の撰者

このことについては、山田博士は全巻を空海の撰として疑っていない。岡井博士は、「¹⁶⁾首に、東大寺沙門大僧都空海撰と有るが正しくば、東大寺別当次第に

大法師空海天長元年三月二十六日少僧都に任ず、七年（八三〇）大僧都に任ず、承和二年（八三五）三月二十一日
禪居

と有るから、大師五十七歳以後の作だ。……但し今の本は、分巻が前後で其の系統を異にして居て、果たして全部が大師の手に成つたかも知疑はれぬで無く」と述べ、また別に、「¹⁷⁾著しく目に着くのは、第五帖の首に、篆隸万象名義第十五之下 の下に 続撰 惹曩三仏陀 の七字の有ることだ。……惹曩は智能、三仏陀は正覚者の義だと云ふ。大師の業を紹ぐとをがましいとて誰かが此かる変名を用ひたので無かろうか。」と記している。

神田喜一郎博士も、「¹⁸⁾第一帖から第四帖に至る部分と、第五・第六帖の二帖の部分とは、何か別のものを無理になぎあわせた感を免れない。」と述べている。

以下わが所見に移るが、第四帖までを前分、第五帖以下を後分と呼ぶこととする。前分と後分との大きな違いは、

重文（古文・籀文・或体等、玉篇で標出字としているが、その上の字と同字で、反切を記していない字の総称として用いる）の取扱いである。前分では重文を必ずしも標出しないのであるが、後分ではだいたいにおいて標出している。数で示すと、前分では一二六字、後分では五九九字となる。白紙や目次を除く実質本文ページ数は、前分三四九ページ、後分三三八ページと大差がないのに、標出重文の数が後分は前分の五倍弱に及ぶということは、編纂態度の大きな違いである。また重文を標出した場合、前分では「朴[㊦]字」の形式であるのに対して、後分では「同上・上文・上字・籀文・古文」等いろいろの形式を用いている。同一人が第五帖より急に書記形式を改めたと考ええるより、撰者が別であると考えるほうが自然である。

ここで残卷十八・十九の反切用字の特色の項で例外として保留しておいた反切上字の菩字について述べる。反切上字に菩字を用いる例は、切韻系韻書ではこれと同音の並母を表わす用字は41字も用いられているのに、この字を用いた例はない。玉篇残卷でも全巻を通じて所見がない。このような特異な用字が第五帖に至って突然現れて、第六帖になると再び姿を消すのである。

では第五帖ではどういう個所に用いられているかというに、菩字を用いた反切32条のすべてが、残卷・宋本・逸文に对照して、原本玉篇では蒲字あるいは[㊦]字であったと考えられるものである。蒲字を菩字に改めた理由は何であろうか。蒲菩ともに並母重唇音であるが、同声の字は第五帖に薄・帛・毗・瓶・並が用いられ、薄字の使用は十回にも及んでいるから、声類的な意味によるものとは考えられない。そして菩字は並母模韻の字であって、それと同声同韻の完全な同音字は蒲[㊦]だけであるから、その意味で菩字を採用したものと思われる。

用字を改めた心理は何であろうか。全本王仁[㊦]切韻では、陸法言の切韻で反切用字に「治・頭」を用いてある箇所を、高宗・中宗の諱を避けて他の字に改めてあるが、この場合はそれに類することは考えられない。第五帖巻頭の続撰者の記しかたと併せ考えて、仏家的な方向でその心理を解くべきであろう。なお第五帖の反切上字に蒲字がいか所

④字が三か所残っているのは、改め落したものであろう。

以上で万象名義の第四帖までと第五帖以下と撰者が異なるという論証を終るが、前分は署名の空海撰を疑う材料はなく、後分は実名を探る資料がない。ともかく、反切用字では、前分で古色を存し、後分で新しい傾向を示すと述べたことと矛盾するものでなく、空海の所拠本は古い玉篇であり、続撰者の所拠本は新しい玉篇であるとして支障はないこととなる。

なお万象名義撰者論の附論として、第五帖と第六帖とも撰者が異なるのではないかと疑われる点のあることを述べておきたい。その理由の第一は、前述した反切上字善字を用いないこと。第二は部首の記しかたが、第五帖ではほとんどの場所で本文と同じ高さに標出しているのに対し、第六帖では提頭していること。第三には重文を標出する数が、第五帖の一五〇字に対し、第六帖は四四九字と三倍に増加していること。そして第六帖中残卷の存する糸部より索部までを比較するに、残卷の重文を完全に標出しているから、残卷の存せぬ部分もそうであろうと察せられること。第四には、第五帖では誤って同字を前後に重出することの多い（谷部より大部までが特に甚しい）極めて粗雑な態度が見られ、それが転写者の誤りでないことは、重出の双方で反切訓義に繁簡異同のあることでわかる。これに対して第六帖はかかる誤が稀であることである。第五帖と第六帖とは、或は同僚で分担して空海の遺著を続撰したのではあるまいか。疑を存しておく。

七 残卷の分類と所拠本

既述の結果を総合して玉篇の残卷を大別すると、A卷十八・十九が古い姿を示すもの、B卷九・二二・二七を新しい姿を示すものと二つに分ち、さらに後者を、b万象名義に最も近いものとして卷二七、c名義にやや近いものとし

て卷二二、d名義に最も差のあるものとして卷九と、三分することができ。

この分類は、自然のことながら原所蔵者別となつてくる。すなわち、A卷十八・十九は東大寺尊勝院に蔵せられたもの、b卷二七は高山寺と石山寺とに分蔵されたもの、c卷二二は神宮文庫蔵、d卷九は書肆佐々木竹苞楼から出たものであるが、その中間は勝林院の出自であるから、竹苞楼にはそのあたりから流入したものであろう。卷八も竹苞楼の納入で、卷九の僚卷と推定される。しかし卷八と大福光寺に蔵する卷二四とは零墨であつて、内容的に論証することが困難である。

さてこのように分類される異本はどういう経過で生じたものであろうか。B類の中の三つの細別は転写の間に自ら生じ得るとしても、ABの二大別は反切用字から考へて中国本土に因由を求むべきである。梁書の蕭子顯伝に、「先是時、太学博士顧野王、奉令撰玉篇、太宗（簡文帝五五〇〜五五一在位）嫌其書詳略未当、以愷博学於文字尤善、使更与学士删改。」と見える子顯の第二子蕭愷の改訂本を新しい玉篇に擬定するほか、他に考へられない。唐の上元元年（六七四）孫強の増訂したいわゆる上元本玉篇もあるが、反切用字は唐代に下るほど新しいものではない。岡井博士のいう卷十八の説文解字の詳細な引用が、今新しいものと論定した諸卷に見られないのは、梁書にいう「詳略未当」と嫌われて「删改」されたものと見て妥当であらう。また説文解字が別に単行されているのに、わざわざ玉篇に詳細に引用する必要は無かつたに違いない。さらに反切用字を改めたのも、語音の変化のためでなく、平易な通用字に変わった程度であつて、それも厳密な一定の方針を立てているとも見られない。野王原撰より僅か七・八年後のことであるから、その程度と考へて自然であらう。

八 玉篇の直音

山田博士が篆隸万象名義について、「二種の反切あるは、多くは一をとり、又まま直ちに音を注せる所あり」と述べて以来、万象名義には玉篇の反切を直音に改めた所があるという誤解が、周祖謨まで続いているので、その然らざるを述べておきたい。

万象名義の中に直音を記すものは二六条である。そのうち平声刪韻・徹韻・上声琰韻・鑑韻のそれぞれ一字、上声范韻の六字、去声陷韻の二字、去声鑑韻の一字、計十三字はすべて四声韻目の終にある韻に属する字であって、韻内の文字が少く反切の上下字を選ぶのに苦勞するものである。因にいうが反切というものは音標文字のように子音と母音とを接続したらいいものではなく、上下字一体となって発音を示すものであるから、必ず声母と韻母との調和が必要である。従って玉篇で直音にしてあるのは、ちようど「切韻」で范字に「無反語、取凡之上声」と記すのと軌を一にするものである。しかし転写本や宋本玉篇では安易に直音を記しているものも生じている。

また名義の直音のうち、「④⑥、音柎」と「柎、④⑦反」・「④⑧、音紘」と「紘、音④⑨反」・「墻、音曠」と「曠、音反」などをそれぞれ対照してみると、これらの字も正確な発音を表わす反切を思いつきにくくて直音に記したものと理解できる。そして以上の十九字は、玉篇残巻・宋本玉篇・玉篇逸文のいずれにも直音であることが多いので、それが玉篇の原姿であると考える。

残る七字の直音の中には玉篇の転写流布の間に生じたものも含まれているであろうが、万象名義全体の状況から考えて、名義の撰者が私意を以て改めたものとは思われず恐らく所拠本に直音であったのだろうと考える。

む す び

叙上のほかに、玉篇の分部字次音韻等玉篇そのものに関する事項や、上元本玉篇の逸文等玉篇逸文の分類と価値に関する事項、さらに篆隸万象名義の本文等について、愚見を述べるべきことは多いが、今回はとりあえず本校就任を機として、玉篇の残巻を中心としてまとめしてみた。大方の御叱正を請う次第である。

終りに臨み終始御教導を賜わっている神田喜一郎博士、小川環樹博士をはじめ学恩を受けている多数の諸賢に感謝するとともに、本小論は昭和四十四年度文部省科学研究奨励金を受けた研究の一部であることを規定に従って付記する。

（筆者は本学院中高部教諭。本稿は中高部長の推薦により特に掲載したものである。——編集委員）

（一九七〇・五・一七）

【註】

- (1) 大広益会玉篇序による。
- (2) 東洋文庫論叢第十九（昭8）
- (3) 東京文理科大学国語国文学会紀要第三号（昭27油印）
- (4) 昭7〜昭10刊
- (5) 黎庶昌輯、光緒10刊
- (6) 前掲(2) P 79
- (7) 「玉篇と篆隸万象名義について」国語学第31輯（昭32）
- (8) 昭3稿、「柿堂存稿」（昭10）所収 P 154

- (9) 崇文叢書篆隸万象名義解題(昭2)「典籍說稿」(昭9)所収P 138
- (10) 大正15刊
- (11) 昭和41刊
- (12) 大広益会玉篇、今「四部備要」本を用う。
- (13) 平安初期撰、写本一卷。
- (14) 大正新修大藏経圖像部所収
- (15) 新訂増補国史大系二八所収P 629
- (16) 「日本漢字学史」(昭9)P 100
- (17) 前掲(8)P 153
- (18) 高野山大学編「篆隸萬象名義」(昭41)解題P 6
- (19) 民国36故宫博物院影印。民国53年台北广文書局縮印。
- (20) 上元本については機を改めて論ずる。
- (21) 前掲(9)P 137
- (22) 「論篆隸万象名義」(一九三六)。「漢語音韻論文集」(一九五七)所収P 271。「問学集」(一九六六)再収。

難字表

- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ① 康 | ② 廠 | ③ 碩 | ④ 礪 | ⑤ 砢 | ⑥ 砧 | ⑦ 砧 | ⑧ 砧 |
| ⑨ 豈 | ⑩ 訓 | ⑪ 嫌 | ⑫ 轄 | ⑬ 輒 | ⑭ 輓 | ⑮ 輓 | ⑯ 輓 |
| ⑰ 輓 | ⑱ 輓 | ⑲ 砢 | ⑳ 罰 | ㉑ 漫 | ㉒ 濂 | ㉓ 漣 | ㉔ 漣 |
| ㉕ 尸 | ㉖ 瀦 | ㉗ 汰 | ㉘ 蓋 | ㉙ 洒 | ㉚ 雷 | ㉛ 穀 | ㉜ 穀 |
| ㉝ 詞 | ㉞ 吁 | ㉟ 虞 | ㊱ 繚 | ㊲ 詖 | ㊳ 詛 | ㊴ 詛 | ㊵ 詛 |
| ㊶ 匪 | ㊷ 忻 | ㊸ 欬 | ㊹ 軟 | ㊺ 弋 | ㊻ 錫 | ㊼ 錫 | ㊽ 錫 |
| ㊾ 撲 | ㊿ 蒲 | ㋀ 煦 | ㋁ 荏 | ㋂ 餽 | ㋃ 麩 | ㋄ 麩 | ㋅ 麩 |

A Study of the Yù Piān (玉篇)

Résumé

The Yù piān (玉篇) written in 543 by Gù Yě-wáng (顧野王) of Liáng (梁) is the oldest Chinese dictionary. Originally it consisted of thirty scrolls, but they were lost in China, and parts of seven scrolls (No. 8, 9, 18, 19, 22, 24 and 27) remain in Japan. Though Japanese students of these scrolls recognize their value, the precise analysis of them has not been done. Studying fǎn-qiè (反切)—— a kind of Chinese phonetics written in these scrolls, —— I found that Nos. 18 and 19 are the original ones written by Gù Yě-wáng (顧野王), and Nos. 9, 22 and 27 are the revised editions by Xiāo Kai (蕭愷) in 550-551.

Six volumes of the Tenrei-banshō-meigi (篆隸万象名義) have been thought in their style to be those of the Japanese priest Kūkai (空海) who edited the first four volumes simplifying the Yù piān (玉篇) in 830-835, and another priest edited the two volumes continuing Kūkai's work. This was confirmed by their contents. Moreover, I believe that the texts used in editing the first four volumes were original ones by Gù Yě-wáng (顧野王) and those for the other two volumes were the revised edition by Xiāo Kai (蕭愷).